

## 日本語支援における部活動の可能性

### —支援時間の確保と部活動の取り組み—

伊藤直（愛知県立刈谷東高等学校夜間定時制）

#### 1. 愛知県立刈谷東高等学校夜間定時制の日本語支援の特徴

##### 1.1. 本校の支援に関わる状況

本校は昼間定時制、夜間定時制、通信制という3課程を有している。愛知県教育委員会高等学校教育課としては外国人生徒支援の取り組みの一つとして、日本語教育支援員を1校につき年間70時間を配分しているが、本校はその時間数を各課程で分けなければならないため、夜間定時制は20時間の配分しかない。

##### 1.2. 実践の背景

そのような状況にもかかわらず、本課程では入学生徒の中に在日期間が短く、ほぼゼロベースの生徒も入学してくるようになってきた。その生徒たちの「日本語がわからないから自分に自信が持てない。」「なんとか日本の高校を卒業したい。」という思いから、数年前より有志の教諭2名で支援をしてきたが、専門性も乏しく、他の校務の関係で、支援に費やすことのできる時間にも限りがあった。また、日本語支援員を迎えるにしても20時間という時間数が大きな壁となっていた。

この状況を改善するために「日本語部」を創設した。これにより、部活動専門指導員として日本語教員を採用し、年間180時間の日本語指導の支援時間を確保できた。また、校外活動も可能となり、支援の幅が広がった。

#### 2. 実践の対象生徒

この実践の成果を確認するために次の2名の生徒を抽出し、検証を行うこととする。生徒A（2023年度2年生）は中学2年生の時にペルーから来日、入学当時は日本語でのコミュニケーションが難しく、質問をしても単語で答える程度で、自分から発言をすることはない。生徒B（2023年度3年生）は小学校5年生の時にブラジルから来日、入学当時は「先生の説明が30%ぐらいしかわからない。」と述べており、「もう無理」「終わった」などのネガティブな発言が多かった。2名とも中学校での学習内容は理解できておらず、どのように勉強すればいいのかもわからなかったと思われる。

#### 3. 目標と実践内容

目標と実践内容については表1「支援計画の概要」の通りである。年間合計200時間という支援時間をどう運用するかについては、夜間定時制であることを活かして業前の1時間×週3日間を基本の支援時間とした。本校の場合、すべての支援時間は1名の日本語教育支援員の先生にお願いしているため、基本的には支援員が活動の計画を立てている。

また、高等学校という性質上、一定の成績を修めなければ進級・卒業はできない。日本語支援

を続けるためには支援時間の中で学習支援も必要である。学習支援に関しては、生徒の要望や教員との相談で考査期間中はやさしい日本語で学習内容や勉強方法を教えるなど、生徒のニーズに応じた運用を意識して行った。

表1 支援計画の概要

	生徒A	生徒B
22 年 度	【共通目標】初級文型を習得し身近な事柄について話したり書いたりできる。間違いを恐れずに日本語を使い、日本語の上達を自覚し自信を持つ。また、基本的な学習方法を身に付ける。	
	【内容】ディクテーション、初級文法、読み物、作文、ロールプレイ、授業内容の学習、学習方法の支援	
23 年 度	【共通目標】日本語力の向上（日本語能力試験N2合格）	
	【内容】ディクテーション、読み物、要約、N2文法・読解、授業内容の学習	
	【個別目標】自分の考えを相手に伝えることができる（生活体験発表）。積極的に会話に参加できる。まとまった文章を理解し、要約することができる。	【個別目標】社会に出るための準備として、場面に応じた日本語の使い分けができる。待遇表現や面接等の受け答えができる。
	【内容】生活体験発表作文、発表練習	【内容】志望理由書、面接練習、待遇表現

#### 4. 結果と考察

部活動の立ち上げにより、多くの支援時間が確保することができ、生徒の要望に柔軟に対応することが可能となっている。生徒は当初、前向きに取り組む様子は見られなかった。しかし、高校を続けることの難しさに直面したり、週3日の日本語支援を通じて自分自身の成長を感じたりしながら、様々なことに前向きに取り組むことができるようになった。動詞の活用からスタートした生徒が苦勞しながらも努力し、定期考査の成績も安定するようになり、今では新聞記事の内容把握もできるようになった。また、生徒Bは就職活動に向けて、面接練習や待遇表現の練習を積極的に取り組んだ。

生徒A・Bともに日本語能力試験N2は数点足らず不合格となったものの「毎日、日本語を教えてくれたから上達した。」と振り返っており、生徒Aは学校代表として愛知県で生活体験作文を発表するまで日本語力が向上した。生徒Aは「緊張したけど、自信がついた。」と述べている。生徒Bは就職活動を前向きに行い、特に面接練習は他の生徒よりも努力している姿が見られた。内定先の企業はブラジル人を雇用したことはないということだが、本人は「大変だと思うけど、これから入社してくるブラジル人のためにも頑張る。」と言っている。他にも、校外活動、ボランティア、学年間の交流というものも生徒にとっては大きな影響を与えていると考える。

今後さらに外国ルーツの生徒が増加すると日本語教育支援員1名だけでは難しい状況になる。その為、日本語教育支援員を中心とした日本語支援の体制を学校として整えていくことが今後の課題である。